

番 組

(2:00)

仕舞
兼平

(シテ) 今井 克紀

(地謡)
山田 伊純
豊嶋 幸洋
廣田 幸稔
宇高 竜成

狂言
長光

(すっぱ) 善竹彌五郎

(田舎者)
善竹 隆平
(目代) 上西 良介

(3:00前)

能
鵺

白頭

(シテ) 今井 清隆

(脇) 有松 遼一
(間) 善竹 隆司

休 憩

(後見) 上吉川 徹

(4:00過)

(後見) 金剛 永謹

廣田 幸稔
豊嶋 幸洋

(地謡) 松野 恭憲

豊嶋 晃嗣
金剛 龍謹
種田 道一
今井 克紀

主催 今井後援会 後援 京都新聞社

仕舞 兼平

木曾源氏義仲が平家を攻め込む中、味方であるべき鎌倉源氏に討たれたのが瀬田の唐橋西の粟津原の合戦。仕舞は主君義仲に続き自ら太刀をくわえ逆さまに馬から落ち、壮絶な自害をみせた猛将今井四郎兼平の最期の場面。因みに彼の姉妹が義仲の妾といわれたあの豪快な巴御前。

能 鵺 白頭

平家物語からの世阿弥作品で、源頼政に退治された鵺の霊がその時の有様を物語るもので、全曲に一種の妖気が漂うキリ能らしい曲です。

最初に諸国一見のワキ僧の登場。熊野から芦屋市に着き、土地の里人(アイ狂言)に宿を乞いますが断られ、夜な夜な怪物が出るという洲崎の御堂で一夜を過ごします。すると囃子と共に前シテ船頭が竿を持ち、丸木舟に乗った態にて登場しますが、ワキからは舟の形は見えても人影は見えませんが、不思議に思う内にシテがワキに言葉をかけ自分はただの海士(あま)だと言います。更にワキに問われると、実は近衛天皇の時代に毎夜皇居の上に出没し天皇を悩ませた為、弓の名手頼政により射止められた鵺の亡魂であると告げます。そしてワキ僧に回向を乞ふと、今度はワキから射止められた時の事を物語れと言われます。

やがてシテが舞台中央に座すと、地謡はクセという部分でシテに代わりその時の有様を語り綴ります。そしてクセの後半、矢が放たれる所作からシテは立ち上がり、

退治された場面を写實的に演じて見せた後、その怪物の死体を見れば、頭は猿、尾は蛇、足手は虎の如くに恐ろしいものであったと語られます。その後再び丸木舟に乗ったシテはあの凄惨な啼き声を残し、波間に消えて中入りです。

例により先ほどの里人(アイ)が出て鵺退治の話が聞かされたワキは、海辺で鵺の成仏を祈る読経を謡うと、後シテ鵺の霊が奇怪な姿で橋掛かりに登場。ワキに向かつて合掌するや舞台に入り、矢先にかかったのは天罰であったと懺悔しワキの供養に感謝し、むかし帝を悩ませた為に頼政に退治された事、一方頼政は恩賞(亀岡市の土地)を賜るなど名を上げた事、自身は舟に閉じ込められ淀川に流された事などをキリの仕舞の中で、シテ独りが両者の姿を入れ替わり演ずるといふ、能独特の手法で目まぐるしく見せた後、救いを求めて消えて行きます。

ちなみに鵺とはキジに似たトラツグミの一種とされ「ヒイヒイ」とか「キーン」という金属音のような声で夜寂しげに鳴くため、当時の上流社会では凶鳥とされたが、本曲では得体の知れない怪物として登場。

本日の「白頭」の小書き演出では、後シテの頭上のカシラが常の赤から文字通り白に変わり、装束も白が主体となります。と同時にクセの型もキリの仕舞も緩急が激しく、相当突っ込んだ型を見せた後、最後シテは幕へ走り込み、舞台上に残ったワキが止める事になります。

使用面

前シテ 怪士(男の怨霊や亡霊に)
後シテ 猿飛出また小飛出(敏捷な鬼畜類に)